

## 「主日の典礼」奉仕者準備会 趣旨説明

私のこの夏の宿題として、「主日の典礼」奉仕者準備会の案のたたき台を作成してみました。

畠 基幸

1. 「翌週の主日の典礼を典礼奉仕の当番になった奉仕者が集まって祈りのうちに準備しましょう。」この提案は日生中央教会、池田教会の典礼委員会に投げかけました。評議会でもまた広報でも呼びかけて、これを推進するために皆さまの積極的賛同と協力をお願いしました。

2. これまでも当番に当たった人は典礼の準備をしていたわけですが、これを共同でチームとして準備することを提案している点がこれまでの準備の仕方と違うのです。奉仕する人たちが集まって共同で典礼奉仕をする。この簡単な取り組みを始めることを提案しているのですが、この提案の中に含まれた私の目的としている小教区の活性化への宣教司牧ビジョンも皆さまに共有していただき、そのビジョンの下に積極的に参加していただきたいと願っています。

3. カトリック信者にとって、小教区全体で教会生活の中心は、主日のミサで、信者の最も重要な信仰の表明の場ですし、神との交わり、人との交わりを実感するところです。「典礼は教会活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である」（典礼憲章10項）公会議後の典礼刷新によって、現在いたるまで小教区ではかなり主日の典礼に力を入れてきたことは確かです。すべて典礼中心、日曜日のミサ中心に日本中の教会が必死になって学んできたことも確かです。

4. ところが、バブル経済の最盛期の頃から、青年たちが小教区から姿を消し、小教区には霊的な祈りの時間はミサしかなく、それ以外の種々の信心会は消滅し、小教区行事や活動は各種委員会が引き受けています。信者は一つの地区に属し、その他に各種委員会のどれか一つに加わるように勧められます。小教区のメンバーの実感を味わえるのは、そのような活動でメンバーとご一緒するときです。そして、小教区は一つの信仰共同体なので、主日には一つに集まり一つのミサを祝う。しかしながら、次第に信者のミサの参加者が減少してきたのです。一つの信仰共同体の祝いとして典礼を行いながら、主日のミサが秘跡を通して信徒の力となるような養成の機会や交わり、またその手段や方法が現代の信徒の信仰生活を深める形になっていないことに気づくようになりました。

5. 「神父さんは、ミサと秘跡さえちゃんとしてくだされれば、あとのことはみなすべて信徒が引き受けます」と司祭不足のこの時代、信徒ができることは何でもしなければと、種々の責任を分担して評議会、各種委員会、地区の方々に小教区を運営する意欲があります。そのことに対して司牧チームは感謝しておりますし、確かにミサと秘跡はちゃんとしてきたようにも思います。ところが、この考え自体は前時代的な発想なのです。第二バチカン公会議もなかったかのような教会観なのです。私たちの教会観は、古代からの二元論的な「聖なるもの」と「世俗のもの」の分類に影響を受けていて、聖なるものは聖職者に、あるいは典礼や祈りに、そして「世俗のもの」は信徒にという二分法に支配されています。この長年の考え方を脱却して、第二バチカン公会議の諸文書に表明された単一的な世界観を咀嚼して、公会議が信徒の役割は、イエスの祭司職、預言職、王職に与ると表現したことを実際に実現する方向へと転換していく必要があります。わたしのビジョンは、絵に描いた餅となる危険がありますが、皆さんがその目的と意義を理解して参加して下さるならば、信徒が日曜日だけの教会生活から、ミサの典礼によって力を受け、週日の毎日をキリスト信者としての目覚めた意識で社会生活をし、そして、各自が毎週小教区の中のさまざまな小共同体で集まり、みことばを中心に分かち合い、祈り合い、学び合うことができるような生活へと成長することを目指しているのです。

6. 私たちの小教区も高齢化と少子化に悩まされています。次期の評議会会長候補や評議会の役員になる人がいないとか、日曜学校の先生や中高生を世話する若者たちがいないとか、高齢者・病人や弱い人への奉仕者がいないとか、次の世代の教会を担う人たちが少なくなっただけでなく、これまで教会のよい信者だった人たちも、歯が抜けるように教会から離れてしまったということもあります。以下のようなケースも目立ちます。多数の在籍不明信者です。教会は捜査機関ではないので、強制力もなく、すべて自己申告に基づいて信者籍を処理します。転入・転出の届け出がなければだれも信者の異動がわかりません。信者籍があれば各種のお知らせが届き、また所属信者の義務として応分の維持費の請求があります。これは一家族ずつではなく、子供さんが自立すれば、子供さんにも各自維持費を払う義務が生じます。信者籍をそのままにして巣立った子供たちは維持費を払わず、また在籍であっても教会離れで維持費を払わない信者と連絡の取れない在籍不明信者が相当数に上るのです。

7. 「永遠の命の約束」をこんなに粗末に無駄にしてしまうことは、小教区が司牧の力が落ちていることと同時に現代の日本は個人主義的な生き方や考え方に支配されており、家庭や一人一人は孤立化していることが如実に示されて

います。個人情報をもとに住所録の発行はしなくなりました。「信仰の絆」は小教区の特徴ですが、それが失われてきたのです。この世の傾向に打ち勝つためには、共同体全体で取り組む必要があります。その方向性は、第二バチカン公会議や大阪教区の教会像の中で示される「交わりの教会」という理念を、「諸小共同体の交わり」という形で実現していくことが必要ではないかと思うのです。それを作る端緒が、「主日の典礼」奉仕者準備会であると考えています。

8. 「小共同体の交わりの構築」の方向性は、すでに米国では、現代の教会における「キリスト者小共同体運動」を取り入れており、合衆国186教区のうち130教区で「RENEW(刷新)」のプログラムを学び、「さまざまな小共同体で成り立つ小教区」という小教区の理想を実現したことが言われています。このプログラムは、「キリスト者小共同体—21世紀への希望の展望—」（菊池功司教諭、新生社）で詳しく紹介されています。このプログラムを導入して司牧方針とするには、まだまだ先は長いと思います。ただわたしが言わんとしている方向性を明確に示していると思いますので、参考図書にさせていただければいいかと思います。

9. ところで、「共同体」という概念を何か難しく考えると一歩も前に進みません。ここで考えている「共同体」は、前掲書の中で示されている「共に祈り、分かち合い、宣教し、支え合い、学び合い」のあるような5つの要素がある共同体のことです。

私の提案していることをまとめてみますと、主日のミサ後、翌週の典礼奉仕の当番に当たっている人が、一緒に「聖書と典礼」を分かち合う時に、この5つの要素を満たすような方法論をつかって翌週の準備をする。その方法に、レクチオ・ディビナのみことばと祈りを統合したやり方で準備する。その方法を学んだ人が、その人の属する委員会でも同じやり方で委員会を導く。その方法が地区の集会でも使われてより親しいメンバーが毎週のように集まり、レクチオ・ディビナによる方法を通して5つの要素を含んだ小共同体をつくることによって次第に「信仰の絆」が深まり、社会に浸透する信仰の喜びを生きるようになります。前掲書の「さまざまな小共同体で成り立つ小教区」とは、以下のような共同体ビジョンです。それを私たちの活動にあてはめると、

1. 季節小共同体 — 「主日の典礼」奉仕者準備会
2. 奉仕者小共同体 — 評議会、聖歌グループ、アルファコース、社会活動
3. 小共同体 — 地区の集い、聖書100週間、 などです。

「主日の典礼」 奉仕者準備会 (実施要項)

集まる人 地区の典礼当番 (朗読奉仕者、献金奉仕者、共同祈願)  
典礼奉仕者 先唱者、オルガニスト、聖体奉仕者  
答唱詩篇担当者  
司式司祭 (司牧チーム)

式次第

はじめの祈り お告げの祈りと聖霊を求める祈り  
朗読 (朗読奉仕者が朗読する。) 「聖書と典礼」を使う  
聖書と典礼」のテキスト全体を読む。(その後沈黙)  
しばらく 心に響く箇所を書き出す (深読法を使う)  
(レクチオ・ディビナ形式)

※テキスト自体は何を語るか？：

「  
欄外の言葉の説明などを見る。  
ネットの福音のヒントを参考にする

※このテキストはわたしに何を語るか？

\*ミサのテーマは何か？ 公式祈願の願いを読む。

※語られたことばにどんな祈りをしたいですか？

\*ここに響いた箇所を繰り返してもよい

※小教区のためにこれらの言葉は何を意味するか？

公式祈願文を参考にする？

※小教区としてどんな祈りをささげますか？

終わりに：

神への感謝として賛美の祈り (答唱詩篇) をささげる。

主の祈りと結びの祈願をささげる。

祝福を願う